2. パネルディスカッション

日本における視能訓練士の現状と将来

The Status and Works of Orthoptics in Japan

—Present and Future—

1) アンケート調査結果の報告 (学術係)

○若林憲章・守田好江・藤戸章子・小倉洋子
半沢理恵子・中村桂子・松井茂子・川瀬芳克

Result obtained from questionnaire

Noriaki Wakabayashi	Eguchi Eye Hospital
Yoshie Morita	Keio University School of Medicine
Akiko Fujito	Children's Medical Center of Osaka City
Yohko Ogura	Teikyo University School of Medicine
Rieko Hanzawa	Kantoh Rohsai Hospital
Shigeko Matsui	Hyohgo Children's Hospital
Keiko Nakamura	Osaka Medical College
Yoshikatsu Kawase	Aichi prefectural Center of Health Care

I はじめに

日本視能訓練士協会が十周年を迎え、第19回研究会において十周年記念行事が開催され、その際シンポジウムにおいて「視能訓練士の現状と将来」を取りあげた。シンポジウムの一環として「視能訓練士の現状と将来に関するアンケートその1・その2」と題する調査を行ったので報告する。

II 調査目的

本調査は、日本の視能訓練士がおかれている現状を充分把握すると共に、会員の意見を集約する目的で行った。

III 対象と方法

対象は、昭和56年8月現在の全会員及び会員の所属する医療機関であり、会員名簿より抽出

した。アンケートその1（会員別アンケート）の対象は、全会員の718名であった。アンケートその2（医療機関別アンケート）は、各医療機関の代表者が対象で、名簿より636名であった。しかし、所属変更等が完全に把握されていないため重複や欠落が生じ、正確な対象数はつかめなかった。実施時期は昭和56年8月であり、方法は郵送調査によった。

IV 回収数と回収率

表1に示すように各会員宛の発送数は、718通、回収数227通で回収率は31.6%であった。また各所属医療機関宛の発送数636通、回収数は164通であったが前述の理由で正確な対象数の把握が出来ず回収率の算出は不可能であった。

V 集計方法

アンケートその1の集計は全て単純集計に

表 1

アンケート総回収数

	発送数	回収数	回収率
各所属医療機関 (代表者)宛	636	164	
各 会 員 宛	718	227	31.6%

表 2 **群別回答数と人数(各所属医療機関宛)**

群	回答数	人 数 ^(人)
国立大学病院	13	22
私立大学病院	19	60
国 立 病 院	4	9
自治体立病院	41	73
公立病院に準じる病院	34	44
私立総合病院	12	17
眼科病院・医院・診療所	32	53

表 3

群別回答数(各会員宛)

群	回 答 数
国立大学病院	17
私立大学病院	48
国 立 病 院	5
自治体立病院	54
公立病院に準じる病院	36
私立総合病院	15
眼科病院・医院・診療所	34

よった。アンケートその 2 の集計は医療機関毎に行い、同一の機関より 2 通以上の回答があった場合はその代表をとり重複しないようにした。なお医療機関はその性格により表 2 に示す 7 群に分類した。アンケートでは 11 群としたが、回答を整理する際に調整した。

VI 集計結果と考察**A 各所属医療機関(代表者)宛アンケートの結果****1) 勤務条件について****1. 群別回答数と人数**

回答数の分布とそれに所属する視能訓練士数を表 2 に示す。国立病院の回答数が 4 通と少なく、視能訓練士の数も 9 名であった。

2. 一医療機関あたりの人数と常勤率

図 1 に示すように視能訓練士の数は、私立大学病院では一医療機関あたり 3.2 人と多いが、公立病院に準ずる病院、私立総合病院ではそれぞれ 1.3 人、1.4 人と少ない。

常勤率は私立大学病院で 93.3% と高く、自治体立病院 84.9%、公立病院に準ずる病院 81.8%、私立総合病院 76.5%、眼科病院・医院・診療所 71.7%、国立病院 66.7%、国立大学病院 45.5% の順であり、国立系での常勤率が低い。

2) 研究活動について**1. 学会・研究会活動への参加**

一般的には学会・研究会への参加に心掛けているが、具体的援助については職場により違いがある。国立大学病院・国立病院では学会参加に対する理解はあるものの、具体的援助が乏しい傾向がみられた。今後の改善が望まれる。

2. 日常学習活動について

一般的には日常の学習活動が盛んである。又地域での視能訓練士独自の勉強会が実施されていると 25% の会員が答えている。私立総合病院、眼科病院・医院・診療所では、他機関へ研修に出たり独学による学習に取り組んでいる。日常診療での疑問点の解決は、医師あるいは他の医療機関に勤務する視能訓練士とも連絡をとり、学術の向上に心掛けている。

3. 研究・学習の環境について

当然のことながら、大学病院では、文献・資

図 1

一医療機関あたりの人数と常勤率

図 2

経験年数

図 3

経験年数と給与 (常勤)

料が整いその入手が比較的容易である。その反面、国立大学病院では、視能訓練士の人数が少ない為共同研究が出来る仲間が少ない。私立大学病院では、日常業務が多忙であり研究時間の確保が困難であるとの回答が目立った。

B 会員宛アンケートの結果

1) 勤務状況及びその条件

1. 群別回答数

表 3 に示すように国立病院に勤務する会員からの回答数が 5 通と少ない。他は表に示す如くであった。なお現在勤務していない者の回答は除外したため、回答数の合計が表 1 の回答数とは一致しない。

2. 経験年数の分布

経験年数は免許取得前も含めて計算を行った。図 2 に示すように 2 年未満、2 年以上 4 年未満の比較的若い方が大方を占めている。

一方 14 年以上の経験年数を持つ、日本における視能訓練士の草分けの方々も 20 名以上おられることは心強い限りである。

3. 経験年数と給与 (常勤)

図 3 に示すように常勤者の給与と経験年数は相関が見られず、ばらつきが大きい。平均給与は月収 165,000 円であった。この結果は回答が得られた者だけに限定されるので、全体像とは多少の違いがあることも考えねばならないが、後で述べる国立系での定員化が進んでいない点、給与の基準が定まらないひとつの要因になっているものと思われる。

図 4

給与の分布 (非常勤)

図 5

給与と勤務年数および勤務時間 (非常勤)

図 6

所属変更の経験

図 7

定員化の状況 (常勤)

4. 給与の分布 (非常勤)

非常勤者の 1 時間平均給与は 1,800 円であった。その給与の分布は図 4 に示す通りである。2,200 円までのクラスに全体の 75% が含まれる。

5. 給与と勤務年数および勤務時間 (非常勤)

図 5 に示す。縦軸に時間給を表わし横軸に勤務年数を月に換算し、勤務時間を時間で表わした。

非常勤の者の時間給は、勤務年数・勤務時間との相関が見られない。給与と勤務時間との相関を見るとよい負の相関が見られ、これは非常勤の中に常勤者と同様の勤務体制の者から、ごく短時間の者までを含めるからと考えられる。すなわち長時間勤務者は収入額は多いが、1 時間あたりの収入額は短時間勤務者に比べ低いためと考えられる。

ちなみに勤務時間についての調査結果では、1 週間の勤務時間が、常勤者では 40～50 時間であるのに対し、非常勤者では 3～10 時間の群と 40 時間程度のふたつの群に分れた。

6. 所属変更の経験

図 6 に示すように、現在常勤の視能訓練士で職場の所属変更の経験のある者は、16.4% であるのに対し、現在非常勤の者では 73.1% が所属変更の経験を有している。多い者では 2 回以上職場を変えている者もあった。

所属変更の理由については、常勤者の場合は仕事上の問題・人間関係等を上げているが、非常勤者の場合は結婚・出産が勤務条件を変える為に職場を変える理由になる。

7. 定員化の状況 (常勤)

図 7 に示すように、常勤者 182 名中 162 名 (89.0%) は定員化され、全体的には定員化がなされている。しかし医療機関別に見ると国立大学病院・私立総合病院での定員化が遅々として進まず、厳しい現状である。

2) 仕事の内容について

1. 業務の特徴

主に担当している業務として、あげられるものは、問診・視力検査・屈折検査・調節検査・眼位及び両眼視機能検査・弱視斜視治療計画及び訓練指導・視野検査・眼圧検査・ERG・色覚検査・実験研究統計等である。

殆んど担当していない業務として、あげられるものは、写真整理・手術補助である。

視能矯正に関しては、共通してどの医療機関においても視能訓練士が担当しているが、その他の眼科一般検査については多少の差が見られた。ことに写真整理については、一部医療機関の視能訓練士が担当しているのみであった。

職場の状況によっては、医療請求事務・受付

図8 訓練の実施状況(常勤)

	現 在	将 来
入 院	8.8 ^(%)	13.4 ^(%)
通 院	70.7 ^(%)	18.9 ^(%)
家 庭	54.4 ^(%)	9.6 ^(%)

図9 現状に対する満足度

業務・カルテ整理等の雑務も行っているところもあった。

国立大学病院，私立大学病院，国立病院，自治体立病院，眼科病院・医院・診療所では，視能矯正・弱視斜視の領域が主で眼科一般検査が従であるのに対し，国立病院に準ずる病院，私立総合病院では，この逆であった。

2. 訓練の実施状況(常勤)

図8に示すように，入院訓練は，オルソプティックス，プレオプティックス共に一部の大学病院を除いてはほとんど実施されていない。

これに対し通院・家庭での訓練はよく実施されている。将来入院訓練を希望しているところは，意外に少なく，通院・家庭での訓練を今後行いたいという希望が少ないのは現在すでに実施されていることを物語っている。

検査及び訓練の受け持ち方であるが，検査は場合によっては同一人が行うこともあるが，複数の視能訓練士がいる医療機関においては，来院ごとに担当者が変わることがある。しかし，訓練に関しては，一貫して同一人が担当している。

3) 将来について

1. 視能訓練士としての満足度

図9に示すように，現在視能訓練士の業務に満足しているかという問いに対し，満足しているあるいは，改善の余地はあるがほぼ満足していると答えたものが全体の81.7%であった。不満と答えた者は18.3%で8割強が，満足している。

2. 改善したい点

業務に関することでは，周囲に視能訓練士及びその業務に対する理解が不充分である点をあげ，更に職場における視能矯正に必要な機器の不備な点をあげている。

待遇に関しては，視能訓練士としての身分・立場のあいまいさを指摘し，国立系での視能訓練士の定員化を望み，更に給与を含め待遇の改善を期待している。

研究学習に関しては，研究時間が欲しい，学会等へ出席の折，具体的援助の確立を期待している。

3. 将来像

視能訓練士の仕事を一生続けたいかという問いに対し，出来る限り続けたいという者98.0%，他の医療職あるいは他の職業に変わりたいという者が2.0%であった。

生きがいを感じたことがあるかという問いに対しては，70.0%の者が生きがいを感じたことがあると答えている。それは，仕事が視能訓練士にゆだねられ，治療計画に基き訓練を行った時，更にはその結果が認められ患者あるいはその家族から感謝され喜ばれた時という答えに集約される。

視能訓練士の将来像についての回答は、弱視・斜視の検査、訓練はもとより、眼科一般検査にも習熟すること。地域の医療に参加し、各種健診での視機能スクリーニングを予防医学的立場で行うこと。更に医師の下で orthoptic center などの開設をしてゆきたいことの3つにまとめられた。

4) 日本視能訓練士協会への要望

代表的な意見を以下に列挙する。

(a) 労働条件の改善・視能訓練士の地位向上のためもっと力を入れるべきだ。

(b) 視能訓練士の人材銀行を設立し、求人・求職の斡旋をしてほしい。

(c) 卒後教育にもっと力を入れるべきだ。

(d) 地方での勉強会・講習会を増してほしい。

(e) 日常診療の疑問点の相談の受け入れ体制を作してほしい。

VII まとめにかえて

今回の調査により不十分ながらも視能訓練士の現状の一端が把握できた。今後継続的に調査をすすめ視能訓練士の身分の確立・向上・卒後教育の充実につとめてゆきたい。

最後に今回のアンケートの作製に御指導下さった諸姉、貴重な意見を寄せて下さった会員の方々に深謝いたします。